

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	養護教諭が考える授業実践研究部会
コース	団体研究コース
活動・研究のテーマ	養護教諭が提案する多様性を認め合う保健科プログラム

#### 〈活動・研究の意義および活動報告〉

##### 1、本研究の意義

LGBTQの当事者たちの多くは、児童期から自分の性に違和感を持ち、性について悩む。しかし一方、学校教育において性の多様性について取り扱う授業事例は少なく、当事者たちの悩みに向き合っていないという現状がある。このような現状に対して、小学校から中学校にかけて義務教育の間に系統立てた指導を行い、性の多様性の理解を深めていく学習が必要となる。そこで本研究では、専門的な知識を持った養護教諭が担任の先生と一緒にT・Tで授業実践を行うことのできる授業を開発していくことが、有効な手立ての一つになるという立場に立ち、小学校から中学校までの保健科学習プログラムの構築を検討する。プログラムの構築に向けて、今年度より養護教諭による「養護教諭が考える授業実践研究部会」を東大阪市学校保健会養護教諭部会研究部として発足した。そこで、授業実践を蓄積し、現場に還元していただける汎用性の高い保健学習プログラムを開発し、提案することを目的とする。

##### 2、研究費を活用した特色ある活動

学習プログラムを開発・実践を始めるにあたり、早稲田大学を訪問し、ダイバーシティ推進担当に聞き取り調査を実施した。その中で、大学入学までに性の多様性について触れたり、学んだりしている学生と全く学んでいない学生とでは、「性の多様性」についての意識の違いがあり、意識のグラデーション（大学のダイバーシティ推進担当者の言葉）があるという現状を把握することができた。現在、大学が教職員への「性の多様性」の研修や講演会の開催など取り組みを通してそのグラデーションの底上げを行っている段階であるが、大学生になってからの取り組みだと効果は薄く、底上げをしていくことは難しい状況である。このような状況を変えていくためには、小学校段階から「性の多様性」について触れ、学んでいくことが重要であるという示唆を得ることができた。

また、授業指導案立案をするにあたり、名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ及び南山大学を訪問し、授業実践計画についての指導を受け、LGBTQの児童への支援や授業構成等の示唆を得ることができた。授業後も、児童のふりかえり等を交流し、今後の展開についても協議した。

#### (1) 東大阪市養護教諭部会研究部「養護教諭が考える授業実践部会」発足【写真1】

今年度より東大阪市学校保健会養護教諭部会「養護教諭が考える授業実践部会」を発足した。東大阪市の小・中学校の養護教諭15名が所属し、小・中学校9年間の学びを見据えた多様性を認め合う系統的な保健学習プログラムの作成に向けて取り組みを進めてきた。今年度は小学校保健科1本、中学校保健科1本、夢TRY科（東大阪市独自の総合的な学習の教科）の授業1本について指導案を作成した。指導案作成後、実際に小学校5年生の授業計画は実践を行い、部会所属の養



【写真1】研究部会で授業指導案検討

護教諭で検証し、授業についての意見交流を実施した。

## (2) LGBTQの当事者カップル3組を招いてのトークショー（1月23日）【写真2】

1月23日に4・5・6年生を対象に「カラフルブランケット 井上ひとみさん・瓜本淳子さん」、「Tsunagary オフィス 森口玄貴さん・阪部すみとさん」、「LGBTQ 講師・活動家 東根歩夢さん・未悠さん」を招いて、自己紹介やカップルの馴れ初めなどについて講演会を実施した。講演後の児童のふり返りから、自分の「性」について見つめ直すいい機会になったことがうかがえた。

<児童のふりかえりより>

- ・男だから、女だからとしめつけられずに生きていれて、いいなと思いました。性は、何もかも決めつけられると思っていたけれど、自分で決めていけるのだなと思いました。
- ・今日話を聞いてともだちや知りあいにLGBTQの人がいてもばかにしたりせずそうだんにのろうと思いました。
- ・男だから、女だからといって、差別するよのなかをなくしていけばいいなと思いました。わたしも、相談されるような人になりたいと思いました。



【写真2】カップル3組のトークショー

## (3) えんたくんを活用したワークショップの開催（1月23日）【写真3】

当事者と意見交換を行う授業を設定し、そこでは当事者と児童が「えんたくん」という円卓型の段ボール紙を活用し交流を深めた。「輪になって座る」ことは、「皆が中心から等距離で、人の間に上下の関係がない対等な関係になりやすい」（中野・川嶋 2018）と言われている。児童がこれから遭遇し得る課題と当事者が体験してきた過去の話をしやすくなるという効果を期待し「えんたくん」を活用したが、当事者と話はずんだようでかなり有効的であった。今回のワークショップでは、当事者がつらい思いをした過去のことを自分ごととして捉え、その当事者が経験した問題に対して進んで解決していくことができた。当事者が経験したことは、どのようなところに課題があり、その課題解消にむけてどのようにアプローチしていくのか課題の発見・分析を通して課題を解消していく態度が養われた。



【写真3】えんたくんを用いてワークショップ

### 3、成果と課題

体育科の学習は、性の多様性の理解を深めていくにあたり中心となる教科であると考え。保健領域では、小学校では「体と心の発育・発達について学ぶ」、中学校では「心身の機能の発達と心の健康（性に関する指導を含む）」と学習指導要領に定められている。また、12年ぶりに改訂された「生徒指導提要（令和4年12月）」（文部科学省）では、「性的マイノリティ」に関する理解と学校における対応について示されており、今後、性の多様性における学習はさらに重要となる。

その中で、今年度「養護教諭が考える授業実践部会」を発足し、3本の授業指導案の作成に取り組んだ。授業が疎かにされていると感じる保健科や夢 TRY 科（東大阪市独自の総合的な学習の時間）の授業において、担任の先生や体育科の先生でもできるような授業開発をし、提案できたことは大きな成果だと考える。

しかし一方、2点の課題も明らかになった。1点目は、性の多様性について理解を深めていくには、保健科と夢 TRY 科だけでなく、継続的に学習をしていくために、総合的な学習の時間も含めて、小学校から中学校にかけて教科横断的にさらに系統立てた指導を行っていく必要があるということである。

2点目は、本校で実施した総合的な学習の時間を用いて、性の多様性についての理解を深めていく授業づくりが、他校の小学校や中学校でも実施できるようなプログラムとして広めていくことである。そのためには、専門的な知識を持った養護教諭が、担任の先生と一緒にT・Tで授業実践を行い、総合的な学習の時間の汎用性の高い授業開発が重要となってくる。

次年度以降、「養護教諭が考える授業実践部会」では、以上の成果と課題をふまえ、さらなる授業開発実践とその検証を重ね、養護教諭として授業研究や実践のスキルの向上を図っていきたい。